

"SINPAN NAZOZUKUSI" and "MURIMONDO"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/20481

「新板なぞづくし」と「無理問答の本」

— 近世語研究（その五） —

深 井 一 郎
音 誠 一

（石川県立金沢西高校教諭）

はじめに

「新板なぞづくし」及び「滑稽白癡問答」はともに近世後期の版にかゝり、数少い謎関係の本である。原本は深井架蔵本を用いた。語彙としては、なかなか興味あるものを多く収録しており、とくに振仮名・振漢字などに注目すべきものが存する。勿論、謎・無理問答という性格から、発想・同音類語・同音異義語・洒落・語呂合せなど、さまざまに音韻・語彙の両面から好材料を提供してくれるものである。ここに本文を忠実に翻刻するとともに、若干の問題指摘を行なった。此種の書物の常として、印刷が悪く判読に苦しんだ箇所が多い。詳細の検討は近い将来に行なう予定である。

(一) 新板なぞづくし

本書は縦十七・六cm、横十一・八cmの小型本である。元表紙と思われる表紙は青色で題簽は「なぞづくし」とあり、原形と思わ

れる。裏表紙は黒色で表紙と色が違って後代のものと思われる。丁数は全部で七丁あり、内容は「謎」ばかりではなく他のことば遊びも含んでいる。「三段謎」が48、「吉原と品川の名物、名所比べ」のかけあいと思われるものが16、「新吉原里案内（略図）」「吉原七ふしぎ」「無理問答」が12の構成となっている。

奥付、刊記などはない。表紙右上には墨で消された年号が一部見える。旧所持者のものか。「嘉永四辛亥年四月八日求之」とある。表紙見返しには「十才 大貫千代 明治十三年一月二十八日」「文久三年正月廿三日 大メ吉五□」とあり、前者は稚拙な幼い文字であり、後者はや、慣れた筆である。それぞれ所持者が書いたものか。裏表紙見返しには「此なそ本千代兄君吉五郎十才之折所持之本^二 候千代女十才之正月廿八日□直筆二年号月日各別書附候なり明治十三年辰年御正月廿八日 十才さかいゆすふ女」と墨書されてある。

一丁表には「新板なぞづくし 上」と題名があり、子どもと盛装した女が鞠つき遊びをしている絵が画かれている。一丁裏から三段謎が始まり、一丁分で16題収録されている。一番最初の謎

だけ「……ト掛る」「……トとく」「心は……」と通常の謎掛形式となつてゐる。次からは語句のみの三段謎となつてゐる。語句のみで絵などはない。三丁表には「しんはんなぞづくし」と書かれ、恵比寿と大黒、下方には小判や千両箱が画かれてある。一丁表の「上」に対して「下」にあたるものか。五丁表には「北国南国よそをひくらべ」と題名のごとく書かれ、遊女風の女が二人向いあつて座り、その間に行司風の軍配を持った男が立っている絵が画かれてゐる。○印が吉原、△印が品川をあらわし二句一対になつて名物、名所などをかけあいで紹介してゐる。そのあと「新吉原里案内」と題して略図があり、「吉原七ふしぎ」と続き、七丁表裏は絵入りの無理問答が12収録されてゐる。各題の謎及び無理問答等には私的に通し番号をつけておいた。

新板なぞづくし 本文

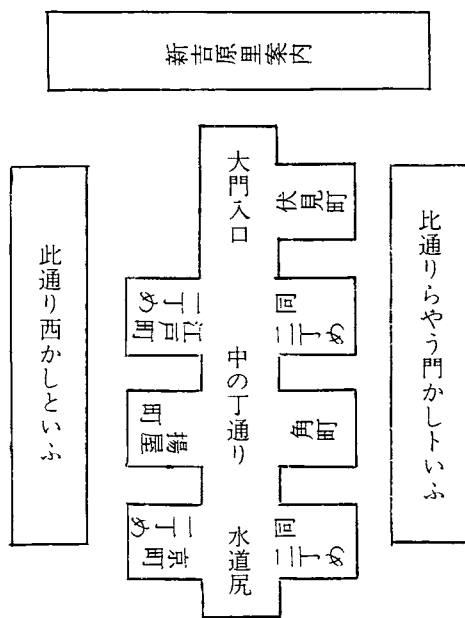
- 1 △井戸の車ト掛る らしやう門トとく
心はつなかはたらく
- 2 △へたなやまし しやうさいふぐ
めつたにはあたらぬ
- 3 △ゆで玉子 大内のみす
なかにきみがある
- 4 △座頭の角力 鯉にくれる菓子
みすになげる
- 5 △あほうもの しかけたふしん
木がたらない
- 6 △伊勢御師 くめんのよい人
はらいをもつて廻る
- 7 △おかやきもち 三ツ目ぎり
きばかりもむ

- 8 △十六七の娘 はんじやうの商人
もうけがたくさん (1ウ)
- 9 △すりきれた筆 てんぼうのしつかき
さつぱりか、れない
- 10 △小野の道風 おふ見世のすけん
かわづにみとれる
- 11 △おしるこに餅のないの ひそう息子のたびのるす
あんしるばかりだ
- 12 △水のない川 利上ケをした質物
ながれる事がない
- 13 △口のなる袖 きおひの女
手がだされぬ
- 14 △手のある女郎 秋のそら
ふりそうでふらない
- 15 △ばかの夜はい へたなけんじつつかい
しないでおたれる
- 16 △よたかのおまんこ こふ山の定とうめう
かづおふくとぼす (2オ)
- 17 △ばかな息子 弁慶七ツ道具
一生のしよいものだ
- 18 △すけべいな下女 山手のはねつるべ
いれるともちあげる
- 19 △わかきがね おきに入のおめかけ
とのさんへつく
- 20 △も一ツわかきかね 一人たのしむ酒
ひかけてねる
- 21 △日本一のあばれ者 今戸のかわらし
鬼をやいてくう
- 22 △はやりかせ ねこにかつぶん

- ゆだんをするとひく
- 23 △手長鳴の着物 ちちごの国
ゆきがたくさん
- 24 △かひかぶつた古着 心がわりのした女
はやくきれたがる」(2ウ)
- 25 △日本唐天ぢく 女郎の見世かけだんす
中がからだ
- 26 △ばアさまよめり つい^{（か説之）}からしたふで
もふさきがない
- 27 △天人の色事 まつりの大あんどう
うへでとぼす
- 28 △せつぶんのおに やかまししうと
まめでこまる
- 29 △て、なし子をはらんだ女 おや船のいかり
おろしてをちつく
- 30 △あけがたのおなら ぶせうなぼうさま
けさまでくさい
- 31 △もんぜきさま 長五十のぜに
五文とくだ
- 32 △ちんぼふのあたまへか^{（マコ）}とつまたと
酒のうへのわるいなまゑい かりさきでふうくといふ」
(3ウ)
- 33 △ぼんと正月 つぎ馬^{（マコ）}ととく
一ツ所にこられてこまる
- 34 △かさアツかき きくづくりうへ木や
はなをくにする
- 35 △ば、アのげいしや つよい関取
だれもころばしてがない
- 36 △やりてのぢ、い ひさしふりてもてたきやく人
- おとことはめづらしい
- 37 △女ゆの番頭 宝ぐら土用ほし
よい物の見あきする
- 38 △こうかの出合 ねぎのなまにへ
くさくつてこわい
- 39 △うぐいす とむらい
うめにきてなく
- 40 △かげまの切見世 石の七りに土ひん
おしりがたまるまひ」(4オ)
- 41 △女郎のいきぢ 地ごくでなだかい山
はりがある
- 42 △川づかる やぶれたすいのふ
こす事ができない
- 43 △ねづみあな よたかのお客
あくとはいる
- 44 △平家御一門 四ツ谷の馬方そば
もりがおふる
- 45 △大男のかり着 三味せん
つんつるてん
- 46 △どうらく息子 おふらいたのせついいん
ほふばからしりがくる
- 47 △おまんこのでき物 たび人のわすれもの
おふかたかさであるふ
- 48 △定斎やのかくらん しりの穴のでき物
人にはみせられぬ」(4ウ)
- 北国南国 よそをひくらべ ○吉原 △品川」(5オ)
1 ○八丁に堀をかまへしくるはなり
△よぎの袖からあはかづさ見る

- 2 ○大一座とまらぬはこちの里
△川づかい大名客がいつづけをする
- 3 ○家ことにうへさせて見る桜花
△御てん山とて花の名どころ
- 4 ○名物はかんろ梅には袖の梅
△白魚とてこちの海から
- 5 ○この里は一夜千両江戸じまん
△入船出船千ぞふこちの里
- 6 ○八さくや雪の道中花の山
△二十六夜におがむらいくわう
- 7 ○さ月どきねながら聞くや田植哥
△二かいざしきでまご哥をきく
- 8 ○にぎはいわとうてふ俄外になし
△しほひにあしをよごす殿様」(5ウ)
- 9 ○ぜんせいは高尾うす雲小紫
△橋向にも百ぞふはなし
- 10 ○うしろにわ日本一のくわんぜおん
△大師の利生しらぬ者なし
- 11 ○きやらの下駄はいた御客の例あり
△見あげておがむ殿の関ふだ
- 12 ○大門でおりて通ふがこちの里
△大名かごを横づけにする
- 13 ○外になし山やどうふはこちの名物
△浅草のりはこちの海から
- 14 ○道中は外八もんじひがらかさ
△七ツ道具に金御もんみよ
- 15 ○吉原は日本一のくるはなり
△此里は日本一の江戸の入口
- 16 ○となりには今若町の曾我芝居当りはつれぬかな手本かな

△かな手本忠臣蔵の「先はなも高輪の泉岳寺かな」(6才)



吉原七ふしぎ

- 1 となりへ行を道中といふ
- 2 真中でないから角町といふ
- 3 物をもらいながらやりてといふ
- 4 年寄でも若イ衆といふ
- 5 赤いを九郎助いなりといふ
- 6 八さくに白むくをきる
- 7 水道尻に水どうなし
是を七ふしぎといふ」(6ウ)
- 1 つちにしやうじてそらまめとはいかん
天にあらわれてほうきぼしといふがことし
- 2 一札の書付にもあらぬよこはらにしやうもんとはみかん
十里あるひてもひぎよりしたを三りとひふがことし

- 3 も、引の事をたことはいかん
土手の古きをいか物といふがことし
- 4 馬にもあらずしてさんまとはいかん
丑にあらでうしをといふがことし
- 5 かみなり門あつてじしんもんなしとはいかん
馬みちあつて丑道なしがことし
- 6 ひとりものをせんどふとはいかん
ひとりでもばんとふといふがことし」(7オ)
- 7 いろあをき物をしろうりとはいかん
くろくもなくあかきものをからす爪と云がことし
- 8 男を先へ云ずしてお染久松おしゆん伝兵衛とはいかん
曾我兄弟を五郎十郎といふがことし
- 9 あんどふにあらぬ物をとぼすとはるか
あぶりこへかけるものをやきもちといふがことし
- 10 角力にもあらぬ物を四ツに取くんだとはいかん
ふんどしにもあらで廻しをとつたといふがことし
- 11 雨もふらぬにふられたとはいかん
あまくにもあらでかきをしようたといふがことし
- 12 みじかきふんどしをまつちうとはいかん
すばけた物をまぢせんといふがことし」(7ウ)

(二) 無理問答の本

本書は縦十七・四 cm、横十一・二 cm の小型本である。表紙は黒で題簽はない。丁数は全部で四十丁あり、各丁の表裏には三箇ずつのいわゆる無理問答が絵入りでのせられている。
一丁表から五丁表までは序、解説といった形がとられている。無理問答の収録数は二百六に及んでいる。序、解説といったなか

に三箇のり、五丁裏から始まり三十九丁表まで続く。途中二十一丁裏だけは二箇で左端に「東都 一筆菴漁翁画作」とあり、前半が終つたような形になっている。三十九丁裏には奥付と思われるものがあり、「滑稽白癡問答二編 一筆菴主人戯輯 続編 嗣出 各一冊宛出版」江戸白銀町二丁目今川橋通り 尾州出店 永楽屋 丈助板」となっている。刊記等は見あたらない。なお最後の四十丁表には「馬喰町四丁目 東都本問屋吉田屋文三郎板」とあり、これも出版元かとも思われる。四十丁裏は模様入りで裏表紙とも見られ、前半後半が別冊であつた可能性と、両者合本一冊であつたことも考えられる。いずれにせよ、後半部或は合一冊のもともとの裏表紙であつたと考えられる。

二百六題の無理問答であるが、序と思われるところでは、「○問係る印 △答て云印」となっているが、五丁裏では「▲問印 ●答印」とあり一貫していない。本文中でも○△から▲●となりまた○△、▲●、○△となり入れかわっている。これは○△印の本と▲●印の本とが合本したとも考えられ、後に黒の表紙、裏表紙をつけ作製したとも考えられる。

各問答の上に私的に通し番号をつけておいた。なお、原本で、本文の左側に「振漢字」が多用されている。翻刻に際しては、振られている文字の下に「」に入れて振漢字を記入した。

無理問答	本文
------	----

月の漏る壁とおもへど寒かな」(1オ)

漢齋

英泉画(判・陽刻)」(1ウ)

仕麼生々々々々
桃栗三年柿八年
面壁九年動十年

迷は百千の法有り悟れば則
酒一杯嗚呼醉たり一期の夢
柳は緑花は紅

鼻で見よ何の香もなし梅の花」(2オ)

此白癡問答は勸懲の意なきに似たれども亦取べきこと有り
童蒙の才智を試一助にて即席に問係ば其言葉に對する事を以て
速に答ふ 才不才を知る事を要とするときは自 勵て其智を練
是稽古の一助にして諷言といへ共教諭となれり

謎前句物は其の属みな是兒童の戯れなれども克是を學ふときは古
事或は物の名其文字通もおのづから及とくならずゆへに明和安永の
頃は専ら世に行れて是を小冊にして梓行す ○指竹篋○聞はつり
○豆鑊炮是等の類は今猶伝へて儘見ることあり 串戲といへど
も學問の階梯ともなりて木のほりするいたづら者は猿法問とも云
犬追ふ童は大法問とも唱へて古く童蒙の遊戯となすものなり

「だれもたへもしないものをくひつみといふがごとしき
「それじやいけねへおいらがこたへるからマアまちなヨ エ、
トもらいもせぬ四角なかみでこしらへてもたこをあげるといふが
ごとしはどふだ
「ナニおとし玉だ おとし玉はほかのうちにあるぜ
「サアなんとでもいつて問ひかけなすぐさまこたへるぜ ア、
らちがあかねへそんならおいらがとうぜ 丸くもないものをくれ
てゆくにおとし玉とはいかに」(3オ)

○問係る印 △答て云印
1 ○松かざりをたきて左義長とは如何
△人足を鳶とい、供を黒鴨といふが如し
2 ○掛ながしに遣へども謙葉とは如何
△持伝へもせぬに代々と云が如し

3 ○海辺にも用ひすして破魔弓とはいか
△小鳥狩にも用ひすして羽子板と云が如し」(3ウ)

壁にむくわが影ばしや秋の暮
九年面壁の眼を灰汗で洗ひ心外無別法と浮世を壁に睨み破ると
も苦界十年の心気辛苦を悟らず 赤い頭巾を脱て不立文字に外八
文字に直指人心の迷ひを察して柳は翠の黒髮花は紅の唇を動かす
迷ひを暁さずは奚ぞ粹の粹たる大悟の域にいたるといはん」(4
ウ)

什麼生か達磨は尻を腐らして世に樂みの一物もなし
一筆芥」(5オ)

▲問印 ●答印

- 4 ▲水を吸くむ壺を瓶とはいかかん
- 鍋の手をつるといふがごとし
- 5 ▲せつかいを号て鶯とはいかかん
- 蛙の子をお玉杓子といふがごとし
- 6 ▲土蔵の戸をうら白とはいかかん
- 当分に遣ひすてるものを標葉といふがごとし」(5ウ)
- 7 ▲五分ほどあるものを一分とはいかかん
- 四ツを四分といはず一両といふがごとし
- 8 ▲女の胸にあるを乳(地)といふて男の胸にあるを天といはざ
るはいかかん
- めかけを接といふて本妻を大といはざるがごとし
- 9 ▲十五夜の一輪を満月とはいかかん
- 過ゆきし三十日先(千)月といふがごとし」(6オ)
- 10 ▲酒の席をとりもつものを太鼓とはいかかん
- 世をはがからぬわがま、ものを大筒ものといふがごとし
- 11 ▲笄橋はあつて櫛橋なきはいかかん
- 髪結あつて仏結なきがごとし
- 12 ▲はめながら指脱とはいかかん
- 足の先までいれながらも、ひきといふがごとし」(6ウ)
- 13 ▲白をめぐらすを引とはいかかん

- 新らしき粉な通しを振(古)ひといふがごとし
 14 ▲一幅かけて慢(万)陀羅とはいふがごとし
 ●三社の神託を詫言(千)といふがごとし
 15 ▲竹にもあらぬ酒をさ、とはいふがごとし
 ●少しの贈ものを松の葉といふがごとし(7オ)
 16 ▲米をいれて搗ながらから白とはいふがごとし
 ●壹斗たらずいれて千石通しといふがごとし
 17 ▲智恵の足らぬを九十六文とはいふがごとし
 ●婆々ア育を三百安いといふがごとし
 18 ▲黒染の古びたるをようかん色とはいふがごとし
 ●丸斗りの紋どころをようかん餅といふが如し(7ウ)
 19 ▲和らかな草花を酸漿とはいふがごとし
 ●黄色の花を蒲公英といふがごとし
 20 ▲不礼のいひわけを御免とはいふがごとし
 ●腹立顔を皺面作るといふがごとし
 21 ▲匂ひもなきものを丁子やきとはいふがごとし
 ●頭にいたゞきもせぬにゑほしあめといふが如し(8オ)
 22 ▲鳥にもあらぬ地名を目白とはいふがごとし
 ●茶にもあらぬ鳥をほうじろといふが如し
 23 ▲人の胸より下を腹とはいふがごとし
 ●人のうしろを海川ならねど脊といふがごとし
 24 ▲水をくむ器を柄杓とはいふがごとし
 ●木鉄で造りながら槌(土)といふがごとし(8ウ)
 25 ▲一ツ備へて神酒とはいふがごとし
 ●一ツともして灯明といふがごとし
 26 ▲江戸生れの気ちがひを狂人とはいふがごとし
 ●大坂新町の傾城を東といふがごとし
 27 ▲人の自慢するを味噌とはいふがごとし
 ●よく働く人をまめといふがごとし(9オ)
- 28 ▲水の出入する門を樋の口とはいふがごとし
 ●早魁にあふて天水場といふがごとし
 29 ▲側に居ながらいぬとはいふがごとし
 ●けいはくものを狼ものといふがごとし
 30 ▲近道の駅路を東海道とはいふがごとし
 ●遠い道を京(今日)大坂へゆくといふがごとし(9ウ)
 31 ▲四五六の三が月を暑といはず夏とはいふがごとし
 ●十一十二の三が月を冷といはず冬といふがごとし
 32 ▲水草にもあらぬ水仙とはいふがごとし
 ●里にあれども山吹といふがごとし
 33 ▲橋の鉄物ならぬ草花をぎぼうしとはいふがごとし
 ●官女も持ねど檜扇といふがごとし(10オ)
 34 ▲品川新宿の出口を大木戸といふがごとし
 ●木で作りながら土橋竹橋といふがごとし
 35 ▲老人のあたるものを火燧とはいふがごとし
 ●真中にいけても炭(角)火といふがごとし
 36 ▲材木屋にあらぬ呉服やを白木屋とはいふがごとし
 ●縮ばかり売ねども越後やといふがごとし(10ウ)
 37 ▲風もふかぬに摺子木をこがらしとはいふがごとし
 ●番人ならぬみそしを関守といふがごとし
 38 ▲同じことを太郎兵衛とはいふがごとし
 ●嘘つくものを万八といふがごとし
 39 ▲煮てもくふものを生貝といふがごとし
 ●今つりあげてもほしかれいといふがごとし(11オ)
 40 ▲手鞆といへども蹴鞠をあしまりといはざるはいかん
 ●たびを足袋と書て綵安を手袋と書ぬがごとし
 41 ▲空に貧福見へもせぬに天びんぼうといふがごとし
 ●有福なくらしでも仕舞たやといふがごとし
 42 ▲口をきく神の使を御師とはいふがごとし

- 悪紙にもあらぬ宗門の始を祖師といふが如し(11ウ)
- 43 ▲女房を妻といへども夫を飯といはざるはいかん
- 遠い親類を飼養た飼といふがごとし
- 44 ▲物を持ぬを卸大根のやうにからみとはいかん
- 合羽傘は砂糖気もなきにあまぐ(雨具)といふがごとし
- 45 ▲草木にもあらぬに醬油の実とはいかん
- 海のさし引ならで醬といふがごとし(12オ)
- 46 ▲大木の林もなくて大森とはいかん
- 十八ヶ村の地名を六道といふがごとし
- 47 ▲髻ばかりに喰せもせて嫁菜とはいかん
- 鼓にもあらぬ草をたんぼ、といふがごとし
- 48 ▲暑中もさすものを髪差とはいかん
- 幅ある櫛を厚むねといふがごとし(12ウ)
- 49 ▲木を集め水に浮めて筏(烏賊)とはいかん
- 紙細工を空へあげたこといふがごとし
- 50 ▲建具の横木にあらずして殿さんとはいかん
- 十露盤ひかへて居るならで奥さんといふがごとし
- 51 ▲楽器にあらぬ木の実を枇杷とはいかん
- かけ物ならぬ木の実を一軸といふがごとし(13オ)
- 52 ▲神無月ありて仏月なきはいかん
- 水無月ありて火無月なきがごとし
- 53 ▲袖の掃り道ならできおひ(木負)とはいかん
- 犬の声ならできおいをきやんといふがごとし
- 54 ▲かたい娘と石といはず木むすめとはいかん
- のろい男をわる口に二本棒といふがごとし(13ウ)
- 55 ▲花にもあらずしてさくら炭とはいかん
- 早く火におこるものを消炭といふがごとし
- 56 ▲糸も通さず縫もせぬ材木を梁とはいかん
- 柱の穴へ通しながら貫といふがごとし

- 57 ▲権兵衛八兵衛がこしらへても大八車とはいかん
- 重荷をもつ男を軽子といふがごとし(14オ)
- 58 ▲病に血(地)の道あれど天の道なきはいかん
- 癩(天)癩はあれども地かんなきがごとし
- 59 ▲子供もわたりながら親父橋とはいかん
- 考へなくわたつても思案橋といふがごとし
- 60 ▲草花にもあらぬ紙を小菊とはいかん
- 能役者にもあらぬ紙を奉しやう(宝生)といふがごとし(14ウ)
- 61 ▲腹の大きな病を脹満(万)とはいかん
- 陰囊の大きな病をせん(千)気といふがごとし
- 62 ▲限りなき病の数を四百四病と極るはいかん
- 千金方の薬に万病丸あるがごとし
- 63 ▲腹も立ず船をつなぐ器を碇とはいかん
- 祈禱もせぬ道具を損といふがごとし(15オ)
- 64 ▲道法ならぬ豆腐の数を一二二丁とはいかん
- 枘にもはからぬ高山の道を一谷二合といふがごとし
- 65 ▲炭薪を積ながら茶船とはいかん
- 海川へもいれぬ置居の筥を水ふね湯ふねといふがごとし
- 66 ▲嫌ひな人もある塩魚をすき身とはいかん
- 薬喰でも始めにくふは毒味といふがごとし(15ウ)
- 67 ▲哥よみの女に赤染衛門馬の内侍とはいかん
- 男に采女もと女あるがごとし
- 68 ▲一ツの考へをも思(四)案とはいかん
- 一ツの巧をも工夫といふがごとし
- 69 ▲海は遠く山になりてなみき(波来・並木)とはいかん
- あげばなしの土堤を堤といふがごとし(16オ)
- 70 ▲日輪一ツを天たう(十)さまとはいかん
- お月さまを十三七といふがごとし

- 71 ▲見もせぬ麻布を三田とはいかん
- 72 ▲売ものにもあらぬにかう「買」じまちといふがごとし
- 73 ▲とまり木にもあらぬを鳥居とはいかん
- 74 ▲魚類にあらぬに鰐口といふがごとし「(16ウ)」
- 75 ▲手に持てふみ「踏」箱とはいかん
- 76 ▲両手をついて足下といふがごとし
- 77 ▲おきてゐるものをねこ「猫」とはいかん
- 78 ▲来るものを猿「去」といふがごとし
- 79 ▲律儀なものを浪面とはいかん
- 80 ▲ゆきわたりのよいものをすいといふがごとし「(17オ)」
- 81 ▲耳にあてず鼻でかきながら香をきくとはいかん
- 82 ▲家のうちの香のかほりを空たきといふがごとし
- 83 ▲日本で産れた鳥をからすとはいかん
- 84 ▲翅をやすめてゐても鳶といふがごとし
- 85 ▲桂馬の高あがりを歩の餌じきといふがごとし
- 86 ▲拔 将棋に居喰あるがごとし「(17ウ)」
- 87 ▲細き糸にてこしらへて太物とはいかん
- 88 ▲刃もせずして絹布といふがごとし
- 89 ▲睦ましきものをむまい中とはいかん
- 90 ▲不実ものをまづい心といふがごとし
- 91 ▲酒をあた、めるものをかん「寒」なへとはいかん
- 92 ▲冷て居てもあつ「厚」焼といふがごとし「(18オ)」
- 93 ▲盃を軽くともつておもいぎしとはいかん
- 94 ▲手もかけずしておさへたといふがごとし
- 95 ▲山でとるものを川茸とはいかん
- 96 ▲位もないものをしい「四位」茸といふがごとし
- 97 ▲目のまへにあるにつりしのぶとはいかん
- 98 ▲見てゐるものを水あふひといふがごとし「(18ウ)」
- 99 ▲法師の持ものを禪「前」杖とはいかん
- 100 ▲仏に先の世願ふを後生ねがひといふがごとし
- 101 ▲老人の腰ならで真直にたてるものをかゞみ「鏡」とはいかん
- 102 ▲寝さびれもせぬ漿 道具をふしかねといふがごとし
- 103 ▲実のあるものをからあさりとはいかん
- 104 ▲木の実にもあらぬにはまくりといふがごとし「(19オ)」
- 105 ▲稲荷に狐のまつりを初午とはいかん
- 106 ▲鷲大明神のまつりを酉の町といふがごとし
- 107 ▲焼物ならぬ染ものをさら「皿」さといふがごとし
- 108 ▲織物ならぬ器を錦手といふがごとし
- 109 ▲田舎に出来て御所柿とはいかん
- 110 ▲日和に出来てもあま「雨」干といふがごとし「(19ウ)」
- 111 ▲朝かけてゆふ禪といふがごとし
- 112 ▲三人前の食事はせねど三ツ口とはいかん
- 113 ▲人挨拶もできかねるを無口といふがごとし
- 114 ▲一日も休まなきに四日市とはいかん
- 115 ▲小網丁のうら通りを稻荷「十日」堀といふがごとし「(20オ)」
- 116 ▲男も乗ものを婦ねとはいかん
- 117 ▲女の子にもあらぬを新造といふがごとし
- 118 ▲手ばやくしながら引ずり餅とはいかん
- 119 ▲犬にもくはせぬに賃「狎」餅といふがごとし
- 120 ▲しらぬ子に喰せてもしるこ餅とはいかん
- 121 ▲外に喰かたもなき餡ころを自在餅といふがごとし「(20ウ)」
- 122 ▲鳥にもあらぬ茄子を鴨焼とはいかん
- 123 ▲魚を焼て雉やきといふがごとし
- 124 ▲和朝で出来て唐紙とはいかん
- 125 ▲日本で仕立て異国張といふがごとし
- 126 ▲起て居てよこねとはいかん
- 127 ▲昔の筆跡ならずして古筆「古疾」といふがごとし「(21オ)」

- 100 ▲一ツ直して対立とはいふがごとし
- 屏風二ツを一双といふがごとし
- 101 ▲悦ぶ言葉に目出たいとはいふがごとし
- 過し吉事も恐(今日)悦といふがごとし

東都

一筆菴漁翁画作(21ウ)

- 102 ○土に生じて空豆とはいふがごとし
- △天にあらわれて箒星と云が如し
- 103 ○浅い川はあれども深川とはいふがごとし
- △深い草さへなきにあさ草といふが如し
- 104 ○武士にもあらぬに蕎麦を手打にするとはいふがごとし
- △二八といへばやさしけれどもけんどんやといふがごとし(22オ)
- 105 ○流の水にもあらぬ病をせきをせくとはいふがごとし
- △家の内に居て藪いもの出来るごとし
- 106 ○四百六十五首あるを唐詩(十四)選とはいふがごとし
- △七千余首の歌あるを万葉集と云か如し
- 107 ○陸にある宮を木船の社とはいふがごとし
- △明るき山を鞍馬山と云が如し(22ウ)
- 108 ▲いろ男のあるをあしがついたとはいふがごとし
- おもしろくだますを手があるといふかごとし
- 109 ▲居つゞけることをひやかすといふがごとし
- すけんすることをひやかすといふがごとし
- 110 ▲九ツの鐘をひけ四ツとはいふがごとし
- 六町ある町を五丁町といふがごとし(23オ)
- 111 ▲客に付て来る人を神といひまつしやとはいふがごとし
- 扱ひの勘定をおいとめといふがごとし
- 112 ▲りかうものをもよんばからしいとはいふがごとし

- わからぬことををしへてしつたかようといふがごとし
- 113 ▲けいせいまことなくあげや町に揚屋なきはいかん
- 客人に情なしたいご持にたいこなきがごとし(23ウ)
- 114 ○しころも付ぬを兜鉢とはいふがごとし
- △練みそ漬を剛の者といふがごとし
- 115 ○何の薫もなきを匂ふ(二王)門とはいふがごとし
- △嘘だともいわぬに本堂といふが如し
- 116 ○弾もせぬ所を三味線堀とはいふがごとし
- △菜も製せずして薬研堀といふがごとし(24オ)
- 117 ○鶯の啼声を法華経とはいふがごとし
- △郭公の本尊かけたと啼が如し
- 118 ○夏花の咲草を雪の下とはいふがごとし
- △暑き時候に咲てかん(寒)草と云が如し
- 119 ○木にもあらぬに霜柱とはいふがごとし
- △餅にもあらぬにあらぬのふるといふがごとし(24ウ)
- 120 ○木にもあらぬ織物を厚板とはいふがごとし
- △植木にもあらぬ小柳と云が如し
- 121 ○物を荷なわねども木香丸とはいふがごとし
- △鉄で作りもせぬものを紫金錠といふが如し
- 122 ○獸にもあらぬ小桶を猿坊とはいふがごとし
- △草にもあらぬ山椒あるが如し(25オ)
- 123 ○竹にもあらぬ木の箱を長持一棹とはいふがごとし
- △平に敷て置ども畳といふが如し
- 124 ○進物を受けて悦を痛入とはいふがごとし
- △眼の端の腫物をもものもらひといふが如し
- 125 ○一千羽の鳥を千鳥とはいふがごとし
- △喜番でも四十雀と云がごとし(25ウ)
- 126 ▲過分と悦ぶをまんぞくとはいふがごとし
- 二本の足を洗つてせんそくといふがごとし

- 127 △鍵にもあらで偽をいふを嘘を突とはいかん
 ●打擲もせずしやべることを口を叩といふがごとし
- 128 △魚にもあらぬ生酔をぼうたらとはいかん
 ●さびた脇差を赤鯛といふがごとし」(26オ)
- 129 △非人にあらぬむかしの書物を古事記とはいかん
 ●手足もいためぬに旧事記といふがごとし
- 130 △はすは娘をきやんといひおてんばとはいかん
 ●埒もなき女房をいぐちなし引ずりといふがごとし
- 131 ●末になりても初茸とはいかん
 ●新米でもおはり(尾張)米といふがごとし」(26ウ)
- 132 △水にもあらぬに身を沈とはいかん
 △川にもあらで流れの身といふがごとし
- 133 △雨にもあらぬにふると云ふられたとはいかん
 △雪にもあらぬにかくとい、かきころばすといふがごとし
- 134 △年寄の廻し方を若いものとはいかん
 △貰ひたがる婆々アを呼でやりてといふがごとし」(27オ)
- 135 △客につれられてくるものを神とはいかん
 △旦那をおおるものを末社といふがごとし
- 136 △山に住けたものを田ぬきとはいかん
 △日数経たる粉にもあらぬをねごとといふがごとし
- 137 △六丁ある吉原を五丁町とはいかん
 △九ツの時をひけ四ツといふがごとし」(27ウ)
- 138 ●精進で呑ながら酒の肴とはいかん
 △寺に魚板木魚のあるがごとし
- 139 △弓射る時に用ひずして矢たてとはいかん
 △石にて作ねども席筆といふがごとし
- 140 △馬をのらねときたなきものをば、とはいかん
 △はねもせぬ毛色をあしげ(足蹴)と云がごとし」(28オ)
- 141 ●静に拍子を取ども囃子とはいかん
- 142 △初に仕そこなひしても仕舞たといふがごとし
 ●火を取ばかりで外に能もなきを十のふとはいかん
- 143 △ひと通りの用をなせども五徳と云か如し
 △角力にもあらぬに手取でなげられたとはいかん
- 144 △鎗にもあらで手管でつきだされたと云がごとし」(28ウ)
 △白拍子の女を仏御前とは如何
- 145 △女房をおかみさま山の神といふがごとし
 ●串にさ、ぬに差身とはいかん
- 146 △揉道具にもあらぬに夜着物といふか如し
 ●一ツ菓子をまんぢうとはいかん
- 147 △壹枚でも千べいといふがごとし」(29オ)
 △味噌醤油で味をつけてすひ(酢)ものとはいかん
- 148 ●墨もすらねど硯ふたといふがごとし
 ●客を蒸もせぬ遊女家を青楼とはいかん
- 149 △酒を呑で遊ぶ家を茶屋といふがごとし
 △善製法のこんにやくでも悪が強いとはいかん
- 150 △ぬりのわるいにもかまわず膳碗といふがごとし」(29ウ)
 ●猫の短き尻尾を午房尻とはいかん
- 151 △音もしらずに狸の腹鼓といふがごとし
 ●目もあるに蛇を口縄と云舌もなき虫をなめくじとはいかん
- 152 △先へとんでゆくものをかへるといふがごとし
 ●一ツの病を疝気とはいかん
- 153 △光りもなきに金玉といふがごとし」(30オ)
 ●色青きものを白 爪とはいかん
- 154 △黒くもなく赤ひものを烏 爪と云が如し
 ●影も移らぬに鏡餅とはいかん
- 155 △早稲の米でもおそなへ(遅苗)と云がごとし
 ●温泉にもあらぬ霜月の中を冬至に入るとはいかん
 △酒にもあらずしてひが(火燭)と云が如し」(30ウ)

- 156 ○火にあぶらすして天窓の毛を剃を月代(焼)とはいかん
 △家に居て手あしの痒を箱やけと云がごとし
- 157 ○おてんば娘を蓮葉とはいかん
 △信心もなき芋の茎をすいき(随喜)といふがごとし
- 158 ○鼠へ作てもろこし(唐)とはいかん
 △大根をから(唐)ものと云がごとし(31オ)
 △比丘尼の身代ならで尼鯛と云娘もうけぬに鱈(子代)とはいかん
- 159 ○まけて売ても勝魚といふがごとし
 △一札の書付にもあらぬ横腹を焦門(証文)とはいかん
 △十里歩行ても膝より下を三里といふがごとし
- 160 ○蔓になるものを木 瓜とはいかん
 △蜀漆をくさき(草木)といふが如し(31ウ)
- 161 ○産婦にもあらぬを七夜(質屋)とはいかん
 △消産もせず八月限で流すといふがごとし
- 162 ○弾もせぬ木の実をびは(琵琶)とはいかん
 △黄金にもあらぬをきんかんといふがごとし
- 163 ○明き寺にもあらぬをかすてらとはいかん
 △小田原の薬店ならで外郎餅といふがごとし(32オ)
- 164 ○食類にもなき寺の台所を庫裏とはいかん
 △喰れもせぬ木を椀楢といふがごとし
- 165 ○喰れもせぬ木を椀楢といふがごとし
 △居て置ものを懸盤とはいかん
- 166 ○居て置ものを懸盤とはいかん
 △翅物のあしにも似ぬを鳥足といふがごとし
- 167 ○草の名を石莖とはいかん
 △玉の名を水晶といふがごとし(32ウ)
- 168 ○町に居ながら山伏とはいかん
 △家に居ながら出家といふがごとし
- 169 ○男を先へ云ずしておそめ久松おなつ清十郎とはいふはいかん
- 170 ○曾我の兄弟を五郎十郎といふがごとし
 △衣類を小袖と云夜着を大袖といわぬはいかん
 △親腕といへどもかさを小腕といわぬがごとし(33オ)
- 171 ○米を焚ながら湯をわかすと云かごとし
 △水をわかしながら湯をわかすと云かごとし
- 172 ○酒にもあらぬ積悪に餘殃(酔)とはいかん
 △多少もしれぬ積善を餘慶といふがごとし
- 173 ○一ツのものを十の芋とはいかん
 △さんしよの皮をから(唐)かわと云が如し(33ウ)
- 174 ○湯殿につかわずして風呂敷とはいかん
 △水もくまぬものをぬり桶といふがごとし
- 175 ○木で作りながら聖人にもあらぬを孔(格)子とはいかん
 △箒もとらねど莊子(掃除)と云かごとし
- 176 ○飯櫃形のおかわをお丸とはいかん
 △定規につかへども曲尺といふがごとし(34オ)
- 177 ○祝儀の麻苧を白髪とはいかん
 △奴のすきな髪を糸びんといふがごとし
- 178 ○喰もの、佃にあらぬものを燭台(食代)とはいかん
 △としよりのあしにもあらぬを蠟燭(老足)といふが如し
- 179 ○一ツ喰ひながらとう(十)辛とはいかん
 △一正のさかなを(五)まめと云がごとし(34ウ)
- 180 ○穴もほらぬにほれたとはいかん
 ●高みにも居ぬにおつこちといふが如し
- 181 ●刀にもあらで手をきるとはいかん
 ●鞆もなきに手くだといふがごとし
- 182 ●角力もとらぬになげられたとはいかん
 ●鎗にもあらぬにつぎだすといふがごとし(35オ)
- 183 ●雨にもあらぬにふるふられるとはいかん
 ●雪にもあらぬにかきこぼすといふが如し

- 184 ▲重荷もおはぬにもてたとはいかん
- 駕にもおはぬにのせられたといふがごとし
- 185 ● 貰ふはづの婆々をよんでやりてとはいかん
- としよりのまはし方をわかいものといふがごとし
- 186 ● 大木を厚くほりて白とは如何
- △ 神前にも仕へずして宜称「杵」と云が如し
- 187 ● 廻る事なきを車海老とはいかん
- △ 遊魚を飛の魚と云か如し
- 188 ● 暗もせぬ餅を斥て鶉焼とはいかん
- △ 鳥の形もなきを落雁と云が如し (36オ)
- 189 ● 角切かくの台を三方とはいかん
- △ 引盃の丸きを各蓋といふが如し
- 190 ● 染物師にもあらで高野山とは如何
- △ 風呂呂屋にもあらぬを湯殿山と云が如し
- 191 ● 耳なきものをきくらげとはいかん
- △ 眼もなきにみるくひといふが如し (36ウ)
- 192 ● 自分の装束を狩衣とは如何
- △ 借着で間をあわしてそんりやうと云がごとし
- 193 ● 花を生掛物ありて寝る処にあらぬに床の間とはいかん
- △ 定式の寸法に作りながら違棚と云か如し
- 194 ● 火に焼ずして尻やけ猿とはいかん
- △ 戦にも出ぬに猪のし、むしやと云が如し (37オ)
- 195 ● 若衆を愛して野郎とはいかん
- △ 賤しき娘を上臈に売が如し
- 196 ● 近所で売ながら豆「遠」腐とはいかん
- △ 丸ではなしにこまかきものをきらず「不切」といふがごとし
- 197 ● 道中にもあらぬ足の袋をたび「旅」とはいかん
- △ 唄にもあらぬ手袋をめりやすといふがごとし (37ウ)
- 198 ● 嘘をつくものを銃炮をはなすとはいかん

- △ なかのわるきを互に弓を引といふがごとし
- 199 ● 馬にも乗る人を牛若丸とはいかん
- △ 近江で生れて武蔵坊といふがごとし
- 200 ● 地獄にもあらぬ鯛を雀やきといふがごとし (38オ)
- △ 鳥にもあらぬ鯛を雀やきといふがごとし
- 201 ● 着るための服に用ひてきぬ「絹」とはいかん
- △ 夕方きてもあさがみしもといふがごとし
- 202 ● 軒に葺て負勝もなき草を菖蒲とはいかん
- △ 取組もせぬに角力草といふがごとし
- 203 ● 倍氣して腹立を焼餅やきとはいかん
- △ 蒲団にくろまるを柏餅といふがごとし (38ウ)
- 204 ● 約束もせぬに松とはいかん
- △ 我にありて竹「他家」といふがごとし
- 205 ● 魚にもあらぬ鳥をつるとはいかん
- △ 焼もの、器にあらでかめといふがごとし
- 206 ● 匂ひなきに轄とはいかん
- △ 樽より出す口を呑口といふがごとし (39オ)

続編

滑稽白癡問答二編 一筆菴主人戯輯 嗣出 各一冊宛出版

- 江戸白銀町二丁目今川橋通り
- 尾州出店 永楽屋丈助板 (39ウ)
- 東都本問屋 馬喰町四丁目 吉田屋文三郎板 (40オ)

(三) 若干の問題点について

金沢大学語学文学研究13号(昭59年3月)で紹介した「なぞ／＼春の雪」と今回の「新板なぞづくし」及び無理問答「滑稽白癡問答」の二種とを相互に比較しその相異点等を報告してみたい。

(1) 「新板なぞづくし」と「なぞ／＼春の雪」との比較

両書とも小型本で三段謎が収録されている。両書ともその形態からみて、江戸末で発行年も近いと思われるので、相異点等を拾いあげてみた。本書「新板なぞづくし」を「新」とし、前述の「なぞ／＼春の雪」は「春」と省略形で示すことにする。

「新」に収められたいわゆる三段謎は四十八題で「春」の方には七十一題となっている。数の上では多少の違いはあるが、傾向を知る上には差しつかえがないと思われる。両書は性格的にかなり違いが認められるようである。共通するものは二題で次の通りである。

新10小野の道風 おふ見世のすけん かわづにみとれる
春4銭なしのぞめきトカケテ 小野、道風 心ハかハづにミとれてる

新19わかきがね おきに入のおめかけ とのさんへつく

春58御小姓衆トカケテ かけがねトとく 心ハとのさんにつく

この二題とも「掛け」と「解き」が入れかわっているが、発想は類似性が強い。

試みに手もとにある「ことば遊び辞典」(鈴木棠三編)で三段謎Bの箇所と照合してみると「新」の方は四十八題中三十一題(65%)がほぼ同じである。ところが「春」の方は同一のものは見当らず、いくらか似かよったものが数例認められるだけのようである。

「新」の方が共通するものが多いことは、当時の謎としてよりポピュラーで庶民の口の端にのぼっていたと思われる。

新22はやりかぜ ねこにかつぶし ゆだんをするといひく

新28せつぶんのおに やかまししうと まめでこまる
新39うぐいす とむらい うめにきてなく

などはよく知られた典型的な三段謎である。「新」は三段謎の「掛け」「解き」「心」とも全般にわたって平易で特別な知識をさほど必要ともせず、しかもおもしろく庶民的であるといえる。

特に男女関係の猥雑な面をとり入れたものが多くかなりきわどく、はつとする面が見られる。こういった面は「新」「春」両書ともみえ、三段謎構成上の重要な柱となっている。通常は性的表現は淫靡な感じを与えるが、たまたみかけるような短い語句のためと、「心」の同音異義とによって感情を柔らげ、いやしきや陰湿さはあまり感じられない。明るく健康的な笑いとして昇華されているといえるのではないだろうか。

新8十六七の娘 はんじやうの商人 もうけがたくさん
春43大ぎんたまトカケテ おさへる盃 心ハまた一つばい
などは性的なおかしさが強い。

「新」は身近な庶民の生活上の言葉でしめられている。それに対して「春」の方は教養的には高い方向にあると思われる。例えば歴史上の人物、芝居上の人物、俳優などが登場してくる。具体的には「新」は渡辺綱、小野道風、弁慶七ツ道具、平家御一門などありふれていて特筆すべきものはない。一方「春」の方は平相国清盛、西行法師、(平)重忠、道鏡、入鹿大臣、樊噲、楠正成と続き、芝居上での真柴久吉、岩永左衛門、あこや、天川屋義兵衛、梅王丸、はるなど、俳優としては岡嶋屋、市川海老蔵、片岡我童、その他町人の富裕階級として大阪鴻の池、加嶋屋、三ツ井、丸などがみえ、固有名詞的なものが多い。「春」は社会的な事象面を意識しているとも考えられる。「春」の方は「新」に比べて内容的に少し程度が高いといえる。「新」より「春」は獨創性が高く、ひとひねりひねったという感じである。

三段謎のおもしろさはいまでもなく「心」の解の意外性にあ

るといえる。「掛け」「解き」の両方に通ずる同音異義の意外性、奇抜性に庶民の共感を呼び、ひとりでに笑いがこみあげてくるというわけである。秀逸と思われるものを二三あげれば
新11おしるこに餅のないの ひそう息子のたびのるす あんしる
ばかりだ

新30あけがたのおなら ぶせうなぼうさま けさまでくさい
春2龍宮城トカケテ 気の弱おんなの孕 心ハと、がたんとあ
る

同音異義の洒落感覚で笑いを呼び楽しむのであるが中には同音異義感覚の少ないものもある。

新37女ゆの番頭 宝ぐら土用ほし よい物の見あきする

「心」のよい物に共通理解が生じているわけである。

新33ぼんと正月 つぎ馬ととく 一ツ所にこられてこまる

も同様で同音異義的要素は弱いようである。いずれにしても江戸庶民の遊びの一つとして、老いも若きも謎かけをして言語生活を楽しんだものと思われる。

(2) 「滑稽白癡問答」(無理問答)

「新板なぞづくし」には三段謎ばかりではなく、巻末に十二題の無理問答が収録されている。この十二題の無理問答と本書「滑稽白癡問答」(無理問答二百六題収録)とを比較及び内容検討してみたい。「新板なぞづくし」の中にある無理問答を「新」、「滑稽白癡問答」の無理問答を「滑」と略記する。

無理問答は「……はいかん」と問いかけ「……がごとし」と答える一種の言語遊戯である。多くは同音異義を掛けたこじつけが主体である。パターンとしてはほとんどきまりきっているといつてよいであろう。「新板なぞづくし」「滑稽白癡問答」も発行年それほど差はないと思われる。発想的、言語的にみても似かよった点がみうけられるのではないだろうか。

共通するものとして

新1つちにしやうじてそらまめとはいかん

天にあらわれてほうきぼしといふがごとし

滑102土に生じて空豆とはいかん

天にあらわれて箒星と云が如し

新2一札の書付にもあらぬよこはらにしやうもんとはるか

十里あるひてもひざよりしたを三りといふがごとし

滑160一札の書付にもあらぬ横腹を焦門とはいかん

十里歩行ても膝より下を三里といふがごとし

新7いろあをき物をしろうりとはいかん

くろくもなくあかきものをからす爪と云がごとし

滑153色青きものを白 爪とはいかん

黒くもなく赤ひものを烏 爪と云が如し

以上三題が同一である。近いものとしては

新8男を先へ云ずしてお染久松おしゆん伝兵衛とはいかん

曾我兄弟を五郎十郎といふがごとし

滑169男を先へ云ずしておそめ久松おなつ清十郎とはいふはいか

曾我の兄弟を五郎十郎といふがごとし

「おしゆん伝兵衛」「おなつ清十郎」の違いのみである。

次の例は「新」と「滑」両書の性格を表わしているといえる。

新10角力にもあらぬ物を四ツに取くんだとはいかん

ふんどしにもあらで廻しをとつたといふがごとし

滑143角力にもあらぬに手取でなげられたとはいかん

鎗にもあらで手管でつきだされたと云がごとし

新11雨もふらぬにふられたとはいかん

あまくにもあらでかさをしよつたといふがごとし

滑133雨にもあらぬにふると云ふられたとはいかん

雪にもあらぬにかくとい、かきころばすといふがごとし

問の方はほぼ同じであるが答は、「新」の方は性的おかしみをこめて「廻し」「かさ」に同音の語を掛けているわけである。「新」がより庶民的で開放的といえるのではないか。「滑」は二百六の無理問答で構成される。内容的には通常のことばが多く、露骨で性的なことばは少ない。前述の三段謎に比べると意外性、奇抜性などは少ないようである。無理問答では限界があると思われる。ただ製作の方は比較的容易なのであろう。例えば数字を利用したものは多い。

新6 ひとりものをせんどふとはいかん(千)

ひとりでもばんとふといふがごとし(十)

滑146 一ツ菓子をまんぢうとはいかん(万)

壹枚でも千べいといふがごとし(千)

その外「滑」から拾いあげてみると、9 満月(万)、先月(千)、14 慢陀羅(万) 詫宜(千)、20 御免(五) 皺面(十)、25 神酒(三) 灯明(十)、61 張満(万) せん気(千)、68 思案(四) 工夫(九)、70 天たう(十) 十三七ツ(月)、92 三ツ口(三) 無口(六)、179 とう辛し(十) こまめ(五)、他に62、93、106、126、142など数が多い。外来語経由と思われる語も庶民の言語生活段階でよみこまれるようになったともとれる。

滑40 手鞠といへども蹴鞠をあしまりといはざるはいかん

たびを足袋と書きて綵安を手袋と書ぬがごとし

滑89 焼物ならぬ染ものをさらさとはいかん

織物ならぬ器を錦手といふがごとし

滑164 明き寺にもあらぬをかすてらとはいかん

小田原の薬店ならで外郎餅といふがごとし

滑197 道中にもあらぬ足の袋をたびとはいかん

唄にもあらぬ手袋をめりやすといふがごとし

綵安(メリヤスの意か)、さらさ、かすてら、めりやすなどの語が出てくる。

「新板なぞづくし」「なぞく春の雪」の三段謎とこの無理問答との関連はどうであろうか。近いというような例はないようである。その性質上むずかしいと思われる。ただ発想的に類似の面をあげてみれば、

新4 座頭の角力 鯉にくれる菓子 みすになげる

滑84 目のまへにあるにつりしのぶとはいかん

見てるものを水あふひといふがごとし

「見ず」に水を掛けたものである。

新19 わかきがね おきに入のおめかけ とのさんへつく

春58 御小姓衆トカケテ かけがねトとく 心ハとのさんにつく

滑50 建具の横木にあらずして殿さんとはいかん

十露盤ひかへて居るならで奥さんといふがごとし

「殿さん」に「戸の棧」を掛けたものであるが、前二例の謎の方が意外性が強くはるかにおもしろい。

「新」の無理問答の中に「とぼす」という語がある。謎にもつかわれている。

新9 あんどふにあらぬ物をとぼすとはるかん

あぶりこへかけるものをやきもちといふがごとし

謎の方では、

新27 天人の色事 まつりの大あんど うへでとぼす(その他、

新16 「とぼす」)

春54 ほたる火トカケテ 村の出合 心ハくさの上でとぼす

この「とぼす」(点灯すると情を通ず)も謎の中で使われている方がスマートでおもしろ味がある。

以上、目につく特徴的な面についての報告を試みた。

この外無理問答の中で特定の語句に対して、同音異義の解説のためか左側に振漢字を使っているのがかなり目についた。これについてはいずれ考察してみたいと考えている。